

Lesson 2

- 1 ジェニファーは昔からの友達のカレンと共に、その夜を過ごしていた。カレンは街の郊外のとても古い家に住んでいた。カレンと大いに語り合い、笑い合った宵を過ごした後、ジェニファーはとても眠くなった。しかし、明るい月明かりの夜だったので、彼女はベッドに入る直前に窓の外を見に行った。時計が真夜中を打っていたとき、彼女は暗い道をやってくる馬のひづめと馬車の車輪の音を聞いた。彼女は、それが馬車ではなくてひとりの御者に操られる大きな黒い霊柩車であるのを知ってぞっとした。そしてその御者の顔は死神のように青ざめていた。彼の黒いコートの袖口からはがいこつの手がのぞいていた。
- 2 その霊柩車は人でいっぱいであった。それはジェニファーの窓の真下で止まった。その御者は見上げて、彼女に向かって「もう一人乗れますよ」と叫んだ。ぞっとして彼女は窓にカーテンを引き、ベッドへ走って行って、頭からふとんをかぶった。
- 3 翌朝、ジェニファーはそれはたぶん悪い夢に過ぎないと思って、カレンには何も言わなかった。朝食後、彼女たちはある大きなデパートへ買い物に行き、彼女はすぐに前夜のおそろしい出来事を忘れてしまった。彼女たちは最上階のレストランで昼食をとった。
- 4 席を立つ時間が来て、彼女たちは勘定を支払い、1階まで降りるためにエレベーターの所へ歩いて行った。エレベーターが来たが、とても混んでいた。「おいでよ。なんとか乗れるわよ」とカレンが言った。しかし、彼女たちが乗り込もうとした直前に係員が振り向いて、「もう一人乗れますよ」と言った。ジェニファーがぞっとしたことには、それが霊柩車の御者の顔であるとわかった。彼女はカレンを引き戻して「だめ。階段を降りましょう」と言った。
- 5 エレベーターは降り始めた。すると突然彼女たちはとてつもなく恐ろしい衝突音を聞いた。ケーブルが切れたのだった。エレベーターは底まで落ちて行き、乗っていた全員が亡くなった。
- 6 だから、もしだれかがあなたに「もう一人乗れますよ」と言っても、その誘いに乗ってはいけない。